

花樹双鳥文綾について

松 本 包 夫

その大部分が八世紀の遺産である正倉院宝庫の歴大な染織品の整理は、大正三年に着手していろいろ現在もお続けられている。

整理の概要はすでに種々な機会に紹介されており、また戦後の年ごとの整理品目は本紀要各号の「正倉院年報」に掲載のとおりである。

さて、ここに採上げる花樹双鳥文綾（仮称）もまた、右のような染織品の整理中、昭和五〇年に第一二八号の唐櫃のなかから発見したものである。したがってこれに関する報告は、ほんらい「年報」中で取扱うべきであるが、後述するようにこの裂（きれ）は、歴大な正倉院裂のなかでも、織法・文様上、数少ない特殊な一群に属するものであって、その実体の客観的報告のみならず、これの正倉院裂中において有する意義を考へることも、あながち無意味とは思えないので、あえてここに別稿をおこして独自に紹介することとしたのである。

以下、この裂を用途・織法・文様の各分野から観察するとともに、その総合的視野から本裂のもつ意義について若干の私見を述べよう。

まず全体図（図版1）にみるとおり、本裂は下方の一部を失なってい

るが、ほんらいは周囲を花卉ふうに裁った八棱形——いわゆる八花形であったことは明らかである。左右の長径は三五センチで、縁から約二センチ内側に外形と同じ八花形に針孔が連続し、その一部には紫色の糸屑がつまっている。そして中央の広い部分がひどく損傷しているのに対し、この幅約二センチの帯状部は保存が良く、もとの部分が別裂の縁取りで覆われていたことを示唆している。右のような現状から推して本裂は、宝庫にいくつか残っているような比較的小形の花形の箱や机の襦（内貼）または褥（上敷）であった可能性が強い。現在は裏裂は全く逸しているが、他の多くの襦や褥と同様に、もとは別裂の裏貼がつけられていたことであろう。ただし宝庫に現存する箱や机で寸法上本裂に適合するものは、いまのところ見当らないようである。

つぎに本裂の織法をみよう。

まず経はゆるく撚りのかかったアイボリー色。緯は経よりもやや太くて殆ど撚りのない浅緑色の平糸。糸込は一センチ平方に経が五一ないし五三本、緯が二六から二八越えていどで、経・緯ともに比較的隙間が少な

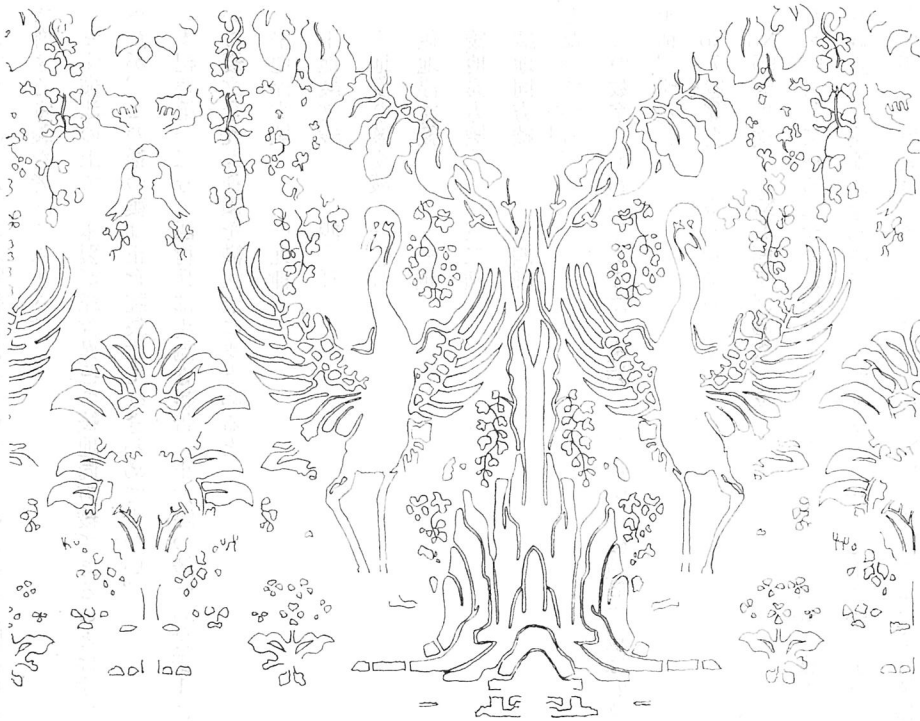
く緊密に織られている。そして部分拡大図（図版2）に示すように、地部（文様のない空間部）は経の三枚綾組織、文様は緯の六枚綾組織であらわれ、綾目は地部・文様ともに左上から右下へと斜に流れている。すなわち経緯異色の綾地同方綾文様（以下、綾地同方綾と略称する）である。

いろいろな組織の綾のうちで、文様が比較的是っきりとあらわれるものは綾地異方綾文様（以下、綾地異方綾と略称する）であるが、本裂は文様部の緯の渡りが長いうえに、経と緯を見分けやすいべつべつの色に変えているので、綾地異方綾以上に文様の頭出が鮮明である。一方、地の部分はアイボリー色の経と浅緑色の緯とが三枚綾という最小単位の綾組織で陰顯するために、玉虫色ふうの微妙な色感を呈し、文様部の印象の強さをやわらげて、帛面は高雅ともいえる趣をたたえている。

つぎに文様の構成を調べよう。

本裂の文様は、ひとくちにいうと、七～八世紀ころに中国・日本で流行した、西方起源の樹下双獣文の系統に属している。

全体図をみると、裂の左右に同じ形の樹木があらわれている。この樹は根元の表現が非常に印象的で、峻険な岩山ふうを呈し、下辺は山裾状にかなり幅広く左右に延びている。幹の上方はいくつもの枝に分岐し、大小の潤葉が重なりあって、天蓋のように上部の空間を覆っている。また樹葉から枝・幹にかけて数条の藤状蔓花が懸下し、上方にはその花房をついばむ小鳥のような姿もあらわされている。そして、この大花葉樹



花樹双鳥文綾文様復元図

の下には、幹をはさんで左右に、両翼をはたかせ後方を見返りながら片脚をかるく浮かせて立つ、大きな鳥がシンメトリックに配されている。上代裂の文様にあらわれる鳥は、現実の特定の種類を忠実に写したものでない場合がよくあるが、この裂の鳥は細く長い首・脚や、尾羽がわりあい短かいらしい点などからみて、おそらく鶴であり、しかもかなり写実的な表現と解して差支えないだろう。さらにまた、この左右にならぶ樹下双鳥文のあいだ（裂の中央部）にも、密に葉の茂ったやや小形の扇形花葉樹一株があり、その両脇には小草花がやはりシンメトリックに置かれている（挿図—文様復元図参照）。

以上は、裂の現状から推定が可能な範囲の構図のあらましであるが、裂の中央部——現在緯だけの纏縷状となっている一帯にも、仔細にみると地と文様の織分けの明らかな部分が随所に点々と残っているから、もとはさらに多くの添文が空間にびっしりと鏤められていたことであろう。

文様全体の上下方向の反復は現状では知ることができないが、横の繰返しはわかる。すなわち、裂の左右端にみえる同じ形の大花葉樹の中心から中心までが一単位で、その間の幅は二七・七センチである。そしてこの大花葉樹は左右どちらも完全な形が織出されているから、この裂はほんらい、一幅（奈良時代の一尺九寸。当時の一尺はいまの約二九・七センチ）中に樹下双鳥文が二組併列する、いわゆる二窠綾であったと思われる。

さてつぎに、以上の観察結果に基づいて、この裂の正倉院裂中において有する意義を考えてみよう。

まず織法の上で、本裂が経緯異色の綾地同方綾であることはすでに述べたが、この種の綾は正倉院裂中ではきわめて少ない。

本紀要第一二号・西村兵部氏調査報告「正倉院の綾」の付表1に出ている綾文全九九種類を織法別にまとめると

平地浮文綾	一九種
平地綾文綾	四〇種
平地変り綾文綾	一〇種
綾地浮文綾	一種
綾地異方綾	三二種
綾地同方綾	四種

（註¹）
となっている。

この数字でもわかるように、全約一〇〇種中、綾地同方綾はわずかに

四種、すなわち

No 7 遠菱文（註²）
No 94 獅子使い文

No 95 天馬文
No 96 樹下鳳凰双羊文

が挙げられているにすぎないのである。しかもこのうちNo 7 遠菱文は、有職裂の立遠菱にきわめて近似した文様で、経緯ともに細く弱々しい糸を使用し、織密度もあらく、それ以外のNo 94 以下本裂も含めた綾地同方綾や上代の多くの綾地異方綾にみられる緊密な組織とは、風合の上でか

なりの違いが感じられる。次頁の表Aに示すようにこの遠菱文綾は、用途も不明の零細裂一片のほか類裂が全く見当たらないということもあって、上代裂と断定するにはなお慎重を要するものと思われるのである。

また経緯異色の綾は綾地同方綾よりも一層少なく、右の西村氏報告に収めるもの二件（No 94・追補）と、同報告以外に南倉の褥二張の縁裂が（註³）見出されるにすぎない。

表A（次頁に掲ぐ）は、以上に挙げた正倉院宝庫現存の綾地同方綾と経緯異色の綾を纏めて関連事項を併記したものであるが、これによっても明らかなように、本裂の発見は、従来正倉院裂中にただ一件（No 94獅子使い文綾）しか存在していなかった経緯異色の綾地同方綾に、あらたな一例を加えることとなったのである。

ところで、正倉院の染織品はさまざまな由緒・使用時期のものから成立っている。

現在までに整理した染織品中、銘記等によって由緒・使用時期が明らかな作品に使われているすべての綾を、文様の種類数と織法の面から分類したところ、次頁に掲げる表Bのような結果を得た。

綾の織法の進化が、平地浮文綾―平地綾文綾―綾地綾文綾の経過を辿るものであることは、つとに説かれているが、表Bにあらわれた数値はこの発展過程にだいたい即応している。すなわち、正倉院裂よりも概してやや古いと思われる法隆寺系の綾幡の綾はすべて平地の綾であり、八世紀中葉の東大寺大仏開眼会用品では綾地異方綾が平地綾を少し凌駕す

る。そしてさらに五年後の聖武天皇一周忌齋会用品では両者のひらきは一層顕著になってきている。

一方、綾地同方綾・経緯異色の綾は、万単位の数で遺存する平地系統や綾地異方綾に対し、文様の種類において七種、裂数からいっても表Aに示したように僅か一点一点（No 7 一種一点・No 94 一種二点・No 95 一種一点・No 96 一種三点・追補一種一点・唐花（？）文褥縁裂一種二点・本件一種一点）にすぎず、しかも天平勝宝九歳以前の記銘品には全くみえないのである。そのようななかにあつて、数少い綾地同方綾と経緯異色の綾中の三点（No 96・唐花（？）文褥縁裂）が、ともに奈良朝末期神護景雲二年の銘をもつ褥の表に使用されていることは注目に値する。^{（註⁵）}綾地同方綾の遺品は平安朝以後にしばしばあらわれ、経緯異色の綾についてもまた同様の傾向がある。経緯異色の綾を奈良朝にんと称していたかは詳かでないが、大安寺資財帳にみえる「四色綾」というものがそれをほうふつさせる奈良朝の資料として殆ど唯一の存在のようであるのに対して、延喜式では近江国の調と織部司の製織品に「二色綾」が挙げられている。もしこれらの記録がNo 94や本裂のような経緯異色の綾を指すものであるならば、この種の綾は平安朝には、中央官庁および一部の地方で国産されていたわけである。

以上のような種々の事情――、すなわち

○綾地同方綾・経緯異色の綾は正倉院裂中において極めて少ないこと

○天平勝宝九歳以前の記銘品にはみえず、神護景雲二年の記銘品に使わ

(表 A)

仮番	西村氏報告の 番号・文様名	組 織 其 他	備 考
一	No.7 遠 菱 文	単色・同方綾	用途不明 新造屏風47号に貼付の小片 (1片)
二	No.94 獅子使い文	経緯異色・同方綾	南倉 褥37, 38号 (2張)
三	No.95 天 馬 文	単色・同方綾	中倉 献物几18号の褥 (1張)
四	No.96 樹下鳳凰双羊文	単色・同方綾	中倉 献物几15号の褥<裏に神護景雲二年四月云々の 墨書あり> (1張) 南倉 褥5号<裏に神護景雲二年四月云々の墨書あり> (1張) 古屏風18号の3に貼付の褥残片 (1片) (以上3点) ※他に同文綾地浮文綾の裾(?) 残欠1枚<東大寺 屏風裂68号>あり
五	追 補 大双竜円文	経2色・緯2色 異方綾	函装古裂10号 楽装束か (1点)
六	唐花(?)文	経緯異色・異方綾	南倉 褥40, 41号縁裂<うち41号の裏に神護景雲二年 四月云々の墨書あり> (2張)
七	本 件 花樹双鳥文	経緯異色・同方綾	南倉 128号櫃新整理品 褥か (1枚)

(表 B)

使用時 織 法	法隆寺系綾幡に 使用する綾文	天平勝宝四年大仏 開眼会用品に使用 する綾文	天平勝宝九歳聖武天 皇一周忌齋会用品に 使用する綾文	神護景雲二年四月称 徳天皇献納品に使用 する綾文
平地浮文綾	2種			
平地綾文綾	6種	5種	10種	2種
平地変り綾文綾	2種			
綾地異方綾文綾		6種	16種	3種 (うち1種は経緯異色)
綾地同方綾文綾				1種
綾地浮文綾				

れていること

○この二種類の綾は平安朝以後にはしばしば遺品が存在すること

○経緯異色の綾かと思われるものが平安朝には国産されているらしいこと

などから推して、経緯異色の綾地同方綾という織法になる本裂は、もし国産ならば早くても奈良後期をさかのぼり得ないことは、ほぼ断言して良いだろう。

さいごに本裂の文様について若干の考察を加えよう。

既述のとおり本裂の文様は樹下双獣系に属するものであるが、表Aに示したように、疑問のあるNo.7を除くと、残るNo.94以下三種の綾地同方綾はすべて本裂と同系の文様である。またそれとともに、西村氏報告にも明らかなように、この系統の綾文は、綾地同方綾以外の組織の綾には全く見出せないのである。

正倉院の綾地同方綾と樹下双獣系文様は、このように非常に密接な関係にあるわけだが、いま本裂を含めたこの四種の織文を眺めると、ただ単に樹下双獣系という大きい範疇に属するという以上に、部分的特徴や全体的感覚において相互にかずかずの共通性がうかがえるのである。

すなわち、部分的には

(イ)樹上から懸下する藤状花房の形式

(ロ)樹木の根元の山岳状の形式

全体的には

(ハ)主文間の空地にわずらわしいほどに中小の添文を鏤める構成

(ニ)概して文様の抽象化・簡便化が少なく、絵画的・写實的傾向が強いこと

(ホ)文様全体を通して流れる感覚が、天平勝宝年代の多くの錦綾にくらべて異国的に思えること

などが、四種に共通の要素として挙げられる(図版3・4・5参照)。

樹下双獣文自体は、正倉院裂中では連珠円文系錦文の内部構成要素の一つに組込まれており、独立文様としても存在し、また夾纈の染文にも見受けられるが、それらは右の(イ)・(ロ)の諸要素のどれかひとつと類似するところはあっても、通じてこの諸要素を共有するものは認めがたい。本裂等四種の綾文は、その他の正倉院染織の樹下双獣文とは別箇の一原形から発したヴァリエーションであったことと察せられるのである。

この四種の綾文の原形らしいものは、わたくしの知る範囲では中国の染織品にもまだ見当たらないようであるが、想像をめぐらせれば、やはり中国で八世紀も後半に入ったころ、樹下双獣文系の新しい一スタイルとして、染織文様に用いられたデザインではなかっただろうか。神護景雲三年、大宰府に綾師を置いたという統紀の記事は、つとに説かれているように奈良後期に伝来した綾地同方綾等の新しい織技を習得するための措置であろうが、その範となり、早くても天平勝宝九歳をさかのぼらない時期にわが国に舶載されていたであろう綾地同方綾は、おそらくこの種の樹下双獣文を織出していたものと思われる。今回発見の本裂も含めて、正倉院の四種の綾地同方綾中に、その範となった舶載品が存在

しているのか、あるとすればいつどのような経路で伝えられたのか、またどれが舶載品に基づく紡織品なのか、それらは簡単に推定を下しうる問題ではない。しかしいずれにせよ、本裂等の四種の綾にのみ共通してみられるような異国味豊かな文様を、従来例をしらなかった織法によって織りあらわした新伝の織物が、わが国人の中国織技に対する伝習意欲を一層もえあがらせ、その結果が神護景雲三年の綾師大宰府設置になったとの想像は、あながち無稽ともいえないのではないだろうか。

さて以上、織法と文様の両面から検討したように、本裂のような織物は正倉院裂中に従来全く類例がなかったというわけではない。しかしまた一方、この裂は織法・文様どちらの面をとりあげても、二〇万に近い正倉院裂中、奈良後期に入ると思われる極めて少数のグループに属するものであることも動かせない。そのような意味において、本裂の発見は、奈良後期から平安朝にかけてのわが染織の様相変遷をうかがううえの数少ない資料に、一つの有力な素材を加えるものとして、やはり少なからぬ意義を有するといえることができる。

(註1) 織法別の合計が綾文の九九種を上まわるのは、一つの文様が二つの織法であらわされているものがあるため。

(註2) 洋数字のナムバーは、本紀要一二号西村兵部氏「正倉院の綾」の図版番号。以下すべて同じ。

(註3) この縁裂については本紀要一一号佐々木信三郎氏「正倉院錦綾に見る特異技法の一考察(三)」に報告がある。

(註4) たとえば佐々木信三郎氏「日本上代織技の研究」(川島織物研究所報告 第二報)の第二章生文裂の項。

(註5) 中倉献物几一五号褥裏墨書

「長一尺七寸 広一尺二寸 以神護景雲二年四月三日 幸行献大仏殿

東大寺」

南倉褥五号裏墨書

「東大寺

献物机褥一枚長三尺三寸
広一尺八寸

神護景雲二年四月三日

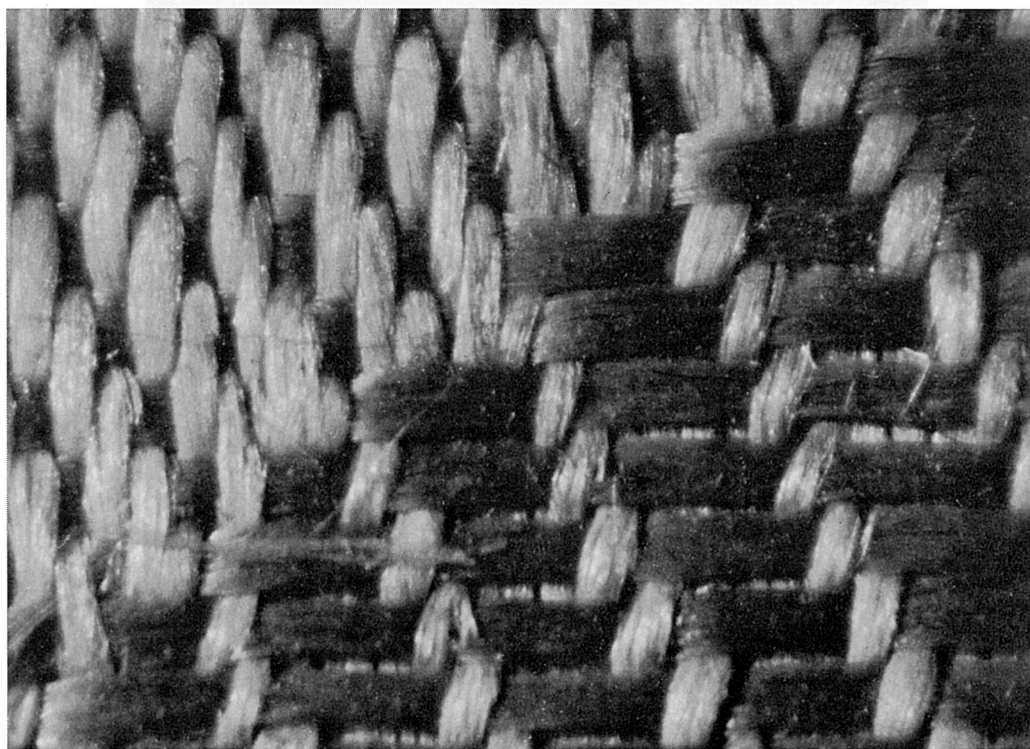
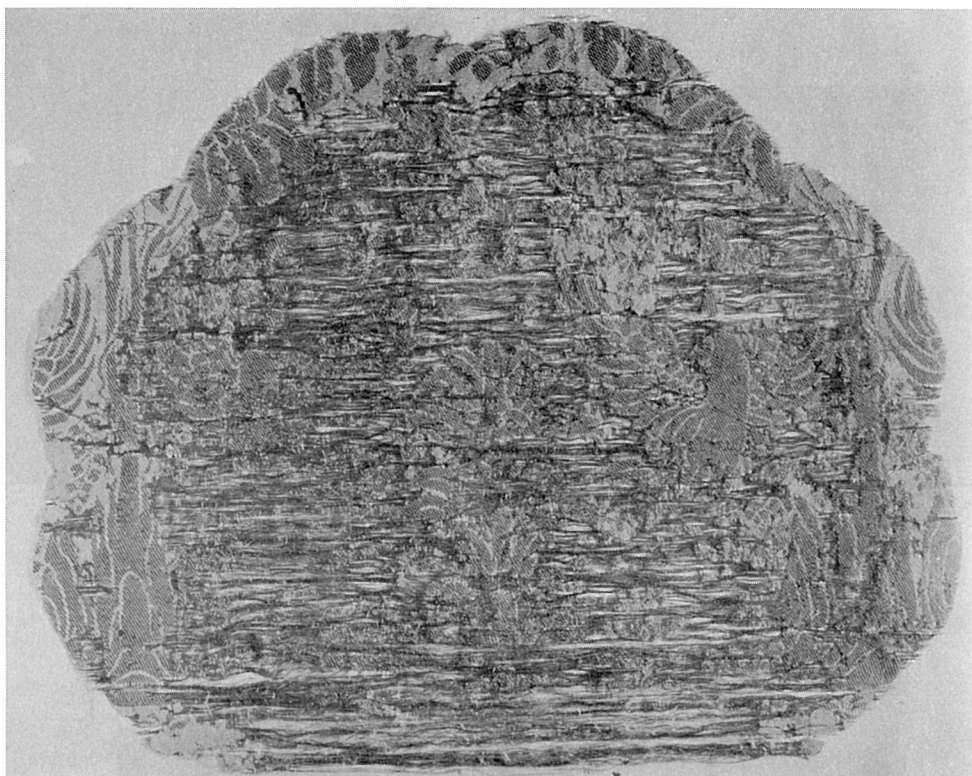
南倉褥四一号裏墨書

二

□物机褥一枚長三尺三寸
広一尺八寸

神護景雲二年四月三日

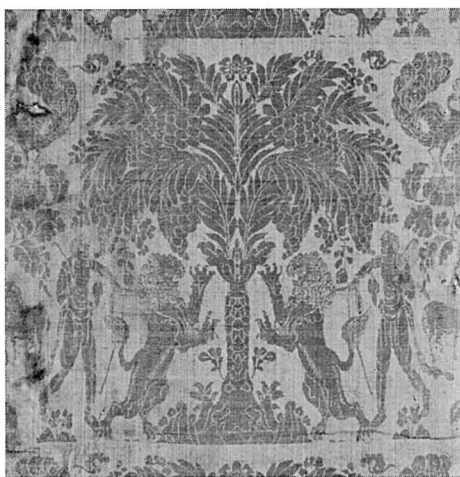
(註6) たとえば西村兵部氏「日本染織芸術叢書・紋織I」(芸艸堂刊)の解説。



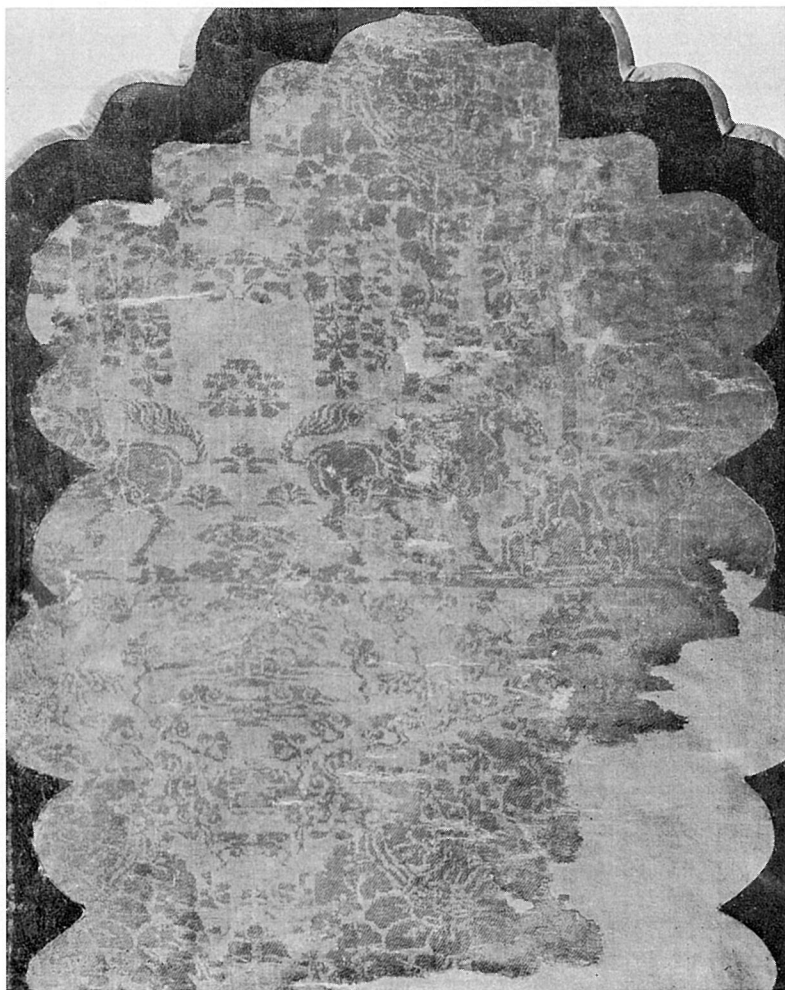
1 花樹双鳥文綾全体図 (上) 2 部分拡大図 (←→緯方向)



5 No. 96 樹下鳳凰双羊文綾



3 No. 94 獅子使い文綾



4 No. 95 天馬文綾